

氏名	孫 文祺
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 6674 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	室町水墨画における中国絵画の受容と変容 —幕府周辺の筆様制作を中心に
学位論文審査委員	准教授 大久保 範子 准教授 本田 晃子 准教授 岡本 源太 清泉女子大学大学院人文科学研究科 教授 佐々木 守俊

## 学位論文内容の要旨

本論文は、日本における水墨画の最盛期ともいえる室町期に、中国絵画がいかに関西の絵師たちに受容され作品へ展開していったのかを日中比較を通じ論じている。特に御用絵師たちにおいて受容された中国人画家の筆様を軸に、史料分析と作品比較を通じることで、当該期水墨画制作のあり方を示し、室町水墨画の特質について解明することを主たる目的としている。

本論文におけるキーワードの一つである「筆様」についてであるが、先行研究では「筆様」の意味について「図樣的な概念」、「図様と筆法」、「様式」の三つの解釈が示されてきたが、定説はない状態にあった。また、これまでほとんど史料上に明記される筆様制作による現存作例と中国絵画の比較研究がなされていないため、筆様による制作の実態と歴史的意義も鮮明にできていないという問題もあった。従来、筆様制作は室町時代特有のものであると指摘されてきたが、成立・展開の様相と、どのように画体による制作へと移行したのかについての議論が十分されてきたとは言えない。そのため本論文では、文献資料、現存作品と併せて考察し、筆様制作の成立の過程とその展開について考察を行っている。

第一章「絵画の「様」について」では、水墨画の「様」について、文献を通じ「様」とは何かを説明する。第一節では、古代の「様」に対する解釈を考察し、主に中国各時代の字書、中国や日本の古典文献に記録された事例を整理し、「様」の意味を検討する。第二節では、日本に舶載された中国絵画の性格を分析し、水墨画の「様」の伝来と形成を考察する。主に室町時代の将軍家の財産目録、行幸記や御飾記及び禅僧たち日記や詩文で記録された唐物に関する史料を分析し、十四、十五世紀において日本に請来された中国絵画の実態と日本人における中国人画家の認識を考察する。

第二章「如拙における「新様」による制作」では、室町初期の水墨画における「様」による制作について、如拙の「瓢鮎図」を中心に、作品の比較を行う。特に、序文に見える「新様」の語に注目し、「瓢鮎図」の制作事情やのちに流行した筆様制作との関係性を明らかにしていく。第一節では、序の「新様」に対する先行研究の理解を概観する。第二節では、史料上に「新様」と記録されている絵画作品を取り上げ、そこでは「新様」が何を意味しているかを考察する。第三節では、室町時代特有の作画のプロセスである筆様制作に着目し、「瓢鮎図」との関係性を解明しようとするものである。

第三章「旧養徳院「山水図襖」における夏珪様の受容と変容」では、史料上に「夏珪様」と明記される唯一の現存作例である旧養徳院「山水図襖」四面に注目し、宗継による筆様制作のプロセスや夏珪様の受容と変容の様相を明らかにしていく。この問題を考えるため、第一節では、旧養徳院襖絵に対する先行研究を概観し、作品を概説する。第二節では、足利将軍家旧蔵の「夏珪国本」と称された作品の原像を探り、その性格を明らかにする。そして、「山水図襖」と現存する諸種の夏珪の山水画卷を比較し、その図様の由来を検討する。第三節では、芸阿弥を経由して受容された夏珪様に着目し、「山水図襖」との関係性を考察する。室町水墨画の制作における夏珪様受容の様相を解明し、夏珪様による制作における芸阿弥の役割を検討する。

第四章「「琴棋書画図」の系譜と馬遠様の受容」では、旧養徳院「琴棋書画図襖」八面に注目し、漢画「琴棋書画図」の図様の由来と成立過程について取り上げ、漢画人物図における馬遠様の受容を考察する。第一節では、「琴棋書画図」及び馬遠様の受容についての先行研究と関連史料を整理する。第二節では、文献資料や伝世作品などを取り上げ、中国における琴棋書画図様の定形化を検討し、漢画「琴棋書画図」の源泉を探る。第三節では、室町時代における「琴棋書画図」の展開について考察し、特に、宗継本、遮莫本と中国絵画を比較し、その図様の由来を探り、宗継における馬遠様の受容について検討することで、漢画系人物図の制作における馬遠様受容と変容の様相を解明しようとするものである。

第五章「室町時代における孫君沢に対する認識と受容」では、孫君沢に対する室町時代の認識と受容を考察し、日本水墨画史における君沢様の位置づけを明確にすることを目的とする。さらに、ほぼ夏珪様の受容の理解を中心に進んできた周文様式研究に一石を投じ、周文派における君沢様の受容の様相を明らかにする。これらを検討するにあたり、第一節では、史料上の孫君沢の記録を取り上げ、そこにみられる孫君沢に対する認識を整理する。第二節では、孫君沢の代表作品と伝承作品に着目し、君沢様の特徴を考察する。第三節では、室町時代の作品を取り上げ、孫君沢作品と比較し、室町時代における君沢様の受容について明らかにする上で、筆様制作の展開と変化を論究する。第四節では、初期狩野派における孫君沢の受容を考察し、筆様制作から画体方式に移行する際に、君沢様の果たした役割を明らかにする。

終章として「筆様制作の展開と特質」において、筆様制作の成立と発展の様相をまとめ、その特質を述べる。そして室町水墨画の画題と図様の系譜と変遷、地域性と時代性を踏まえたうえで、その絵画史上の意義を提示している。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は2022年2月8日、学内審査委員3名、学外審査委員1名によって行われた。

本論文は全五章による構成で、第一章ではこれまで意味の定義が曖昧なままであった「筆様」という語を、日中各時代の文献や水墨画作品から定義づけている。第二章では室町初期の水墨画における「様」による制作について如拙の「瓢鮎図」を取り上げ、本図の序文に見える「新様」と称される内容がいかなるものであったのかを考察し、新しい規範となる図様、あるいは新しい図様を持つ手本であると結論づけた。なかでも室町時代特有の作画のプロセスである筆様制作の現時点で最初の例として「瓢鮎図」を位置づけた点は室町水墨画の方向性を示したという意味でも重要な指摘である。第三章では旧養徳院「山水図襖」を検討し、「夏珪様」と呼ばれるその図様は主に失われた足利将軍家所蔵の「夏珪国本」に由来すると論じるとともに、芸阿弥の影響を受けながら小栗宗湛・宗継へと経由・転用される過程を検証することで、15世紀後半から16世紀前半にかけての山水画制作の様相を明示した。とりわけ「夏珪国本」の原像について、「山水図襖」全体の図様構成が伝馬遠筆「山水図巻」（フーリア美術館蔵）と共通している点を挙げ、伝夏珪筆「山水図」（畠山記念館蔵）と伝夏珪筆「江城図」（現在所在不明）はその断簡である可能性が高いとの指摘は大いに注目される。続いて第四章では旧養徳院「琴棋書画図」を取り上げ、中国における「琴棋書画図」の成立過程と日本の作例を検討することで、小栗派の馬遠様による「琴棋書画図」の制作がその定型化に大きな役割を果たしたことを示し、後世への画体方式での制作への影響にも言及している。加えて第五章では未だ十分な研究がなされていない孫君沢を中心に上げ、その室町時代における認識と受容の問題について、筆様から画体方式への水墨画制作移行の過程とあわせ考察している。孫君沢の中国での受容についてはあまり触れられていないものの、室町期の水墨画制作における孫君沢の存在感がいかに大きなものであったのかを検証を通じて示した点は特に新鮮で、今後の水墨画研究に一石を投じるという意味でも高く評価できる。

一方、昨今のコロナ禍で実見での調査研究が限られていることも関係していると思われるが、取り上げた資料の検討が不十分なため、第3章から第5章にかけて考察が幾分粗雑になっている部分が見られる。特に中国語による文献や資料を精査することは当該研究においてとりわけ重要な意義があり、筆者独自の見解がさらに示せたのではないかと思われる。また先行研究で明らかになっている点と自説の関係性が明瞭ではない部分が散見されるゆえに、本来主張すべき筆者独自の意見が見えにくくなっているのは今後の研究で改善が期待される点である。

しかしながら、中国国内に残る作例や資料など先行研究以外の視点からも多面的に考証を行い、室町期の水墨画の展開を明らかにしようと試みた点はさらなる研究の可能性に満ちたものである。本論で筆者が示した知見も室町期の水墨画にとどまらない幅広い研究領域に刺激を与えるものであり、日中双方で活躍する研究者になる才能をあらわすものとして高く評価したい。

審査委員会は以上の点に鑑み、本論文を岡山大学の博士（文学）の学位論文に認定することについて全員一致で合意した。